

## 日本生命財団に育てられた研究者

東京大学大学院工学系研究科・准教授 中島直人

私が研究者としての第一歩を踏み出したのは、博士課程を1年で中退し、研究室の助手に採用された2002年4月である。助手に着任した初日、最初に手掛けたデスクワークは、研究室の教授から薦められた日本生命財団環境問題研究助成への申請書の作成であった。初めての助成への応募である。右も左も分からないまま、見よう見まねで申請書を書いたことを覚えている。申請したテーマは、「風致地区における官民協働の環境保全型まちづくりに関する歴史的研究－風致協会の70年－」であった。地域固有の環境の保全と良好な住宅地形成を目指した風致地区において、住民が組織し、様々な活動を展開してきた風致協会の経験に、今後の官民協働のまちづくりへの示唆を見出そうという内容で、幸いなことに採択されることになった。この助成を頂いて最も嬉しかったのは、都市計画史研究に必要な様々な重要文献（主に古書）を、初めて思いっきり買うことができたことである。研究者としてのスタートのタイミングでの助成採択は相当に自信になったし、何よりも都市計画史研究を進める上での基本的なインフラを整備することができて、本当に有難かった。

そして、少々時間がかかったが、風致協会に関する研究を発展させ、博士論文を書き上げ、次にその博士論文を学術書として公刊する際に、再び日本生命財団のお世話になった。学術書出版助成を頂いて無事に出版することができた私の初めての単著『都市美運動 シヴィックアートの都市計画史』（東京大学出版会、2009年）は、都市計画の「美」と、都市住民と「美」とのあるべき関係の探求の第一歩として、関東大震災後の東京で設立され、1960年代まで活動実績があった都市美協会という民間団体を中心に展開された都市美運動について、その理念及び実態の歴史的展開を明らかにしたもので、「シヴィックアート」という当時の都市デザイン思想の国際的な文脈への位置づけや、運動を担った個々の都市計画家、都市研究家の思想の解明などを通じて、都市計画史研究に新しい視点を提供することを目指したものであった。この本の出版によって初めて自分の仕事を世の中に「かたち」として示す、そして残すことができたということで、感慨もひとしおだった。栄誉ある東京市政調査会藤田賞を受賞したことも大変嬉しいできごとだった。出版の翌年、私は院生、助手、助教として長らく在籍していた研究室を離れ、自分自身の研究室を立ち上げることになった。

振り返ると、研究者としての出発点、そして研究者としての独り立ちという大事な2つのタイミングで、日本生命財団に助成を頂いた。つまり、私は日本生命財団に育てられた研究者である。改めて日本生命財団の40周年に祝意を表するとともに、これからも日本生命財団がとりわけ新進の研究者たちの力になり、環境に関する学術研究を支え続ける存在であってほしいと心から願っている。